



峠を越える応援歌

〈栃木県〉

多田 一雄 64歳
ただ かずお

「気管支炎を起こしていますね。痰が吐き出せればいいけど、喉に詰まり窒息死することも考えられます」

自宅療養を続ける92歳の母が、いよいよその時を迎えるのかと思えた。

「家族だけでは不安でしょう。訪問看護の回数を増やしましょう」

医師のその言葉に応じ、翌日にさっそく看護師さんが来てくれた。母を横にして、背中をさすったりこすったり。気管の奥にある粘っこい痰が出せるかどうか勝負だという。薬の効果も期待してはいるが、体の大きい母を献身的に処置する看護師さんが偉大に見えた。

母が突然せき込み、「苦しい苦しい」とかすれ声で訴えた。

看護師さんは慌てず体を起こして、

せきをさせた。すると大きな痰の塊が続けざまに出てきた。

「出てきた。いいよいいよ。もう少しだよ」

時に背中をさすりながら、言葉を掛けて励ましている。母もその期待に応えるかのように続けてせきをしながら痰を吐き出した。

「苦しかったね。たくさん出たよ」

その言葉が聞き取れたかのように、息をハアハアさせながら母はうなずいていた。

2日後、「大丈夫ですかあ」と声を掛けながら母の胸に聴診器を当てていた。「通りが良くなっているよ。すごい！がんばった。良かった良かった」

母に何度も語り掛けながら、母の好きな「富士山」を歌った。

「春の花見を楽しみに生きようね」

「春になったら、秋の紅葉を楽しみにね」

母も、笑いながら応えた。

「それじゃあ、ずっと死ねないがね」

まだか細い声だが、2人で笑った声は、病の峠を乗り越えた安堵感に包まれていた。家族の思いを超えるかのようには母に寄り添う看護師さん。この人生の終焉の出会いに、きつと母は感謝していると思えてならない。